

清代雍正帝と乾隆帝の詩文における植物の花ことばからみた円明園の庭園空間の特徴

The Representation and Spatial Feature of the Old Summer Palace from the Language of Plants in the Literature Collection of Poems by Emperor

張 亜平* 咸 光珉** 章 俊華*

Yaping ZHANG Kwangmin HAM Junhua ZHANG

Abstract: This study focus on the spatial feature of the Old Summer Palace from the language of plants in the literature collection of poems by emperor. Through the language of plants, the research analyses the representation of courtyard, and gets that: the plants appeared in livings spaces and touring spaces are mostly expressing the moral honesty and great wealth. At the same time, the peach trees appeared frequently in livings spaces to express the seclusion thought. Farm crops also appeared frequently in touring spaces to emphasize the thought of paying attention on farming. In the religious spaces, the plants are appeared less, and just for ornamental values. There are Pinus only on the political spaces, the plants are not important on this kind of spaces. Overall, the plants are not only the natural beauty of the landscape, but also the expression of the spiritual world beyond the reality.

Keywords: Old Summer Palace, the language of plants, the literature collection of poems, garden spatial feature

キーワード：円明園, 花ことば, 詩文, 庭園空間の特徴

1. はじめに

中国古代の文人は、常に植物の姿・性質あるいは文化的な典故に基づき、植物を人格化し人間の品格を比喻し、文化的な寓意を付与した。そのため、多くの植物は花ことばをもっている。この花ことばの文化は宋元時代に極めて発展し、明清時代に全面的に流行していた¹⁾。伝統的な庭園を造営する時、建造者は往々に植物の自然美に限定されず、植物の花ことばを通じて個人的な情操を寄せている。宋時代の文人の胡次焱は『山園後賦』で「山園内のすべての植物は、私の講学の要領と心身を修養するところである。」と述べた²⁾。植物は造園要素の1つとして、園主の雅趣や思想を反映し、豊富な文化的な情報を込めている^{1,3,4)}。植物の花ことばの観点から植物景観の研究は、建造者の着目点や構想をすらすらと読み解くために有役である。

最初の円明園は雍正帝の皇子時期の邸宅として築かれ、雍正帝は即位した後、円明園を増築され、長期に居住する離宮となった。乾隆帝時代に、円明園が再度拡張され、面積が200haにも及ぶ広大な皇家庭園となった⁵⁾。2人の皇帝は伝統文化における造詣が深く、雍正帝は植物の名を用い初期の庭園を命名した⁶⁾。フランス人のイエズス会宣教師のジャン＝ドニ・アティレは清の乾隆帝の宮廷画家として活躍し、円明園を見た後、友人への手紙の中に「川縁の草木が生い茂っています、四季にわたって花が満開で、まるで大自然が花の種を播くようです。」と描写した⁷⁾。このことから、円明園の植物は非常に豊富であることがわかる。しかし、1860年のアロー戦争時、円明園は破壊され廃墟となり、生き残った1本の古木は1960年頃に伐採された⁸⁾。円明園の植物景観に対する研究は失われてしまった円明園の姿を全面的に認識するのに役に立つのみならず、将来の再建に参考となる。

今まで残っていた円明園の図面の多数は建築・築山・水面に関する資料であり、植栽配置に関する図面は一点もないため、植物景観に対する研究は比較的立ち後れている。建築群を中心とした『円明園四十景図』においては、単一の季節の風景を描くこと、

一部の植物を大ざっぱに描くこと、建築群と築山の遮蔽などのため、植物が全面的に描かれているのではなく、松（マツ）、蓮（ハス）などの明らかな特徴をもつ植物だけを見分けている。直接的な資料には限りがあるが、園主の雍正帝と乾隆帝は詩文を作って日常生活を記録しており、その中には円明園に関する詩文が多く存在する。それらの御製詩文は直接園主の視点から景色を描いており、庭園空間に対する体験を記録している。

円明園の植物に関する既往研究において、現在は再建するための植物の現状調査が多くみられる⁹⁻¹²⁾。御製詩文に基づいて歴史上の植物景観に対する研究の多くは植物種類に集中している¹³⁻¹⁵⁾。一部植物の花ことばに関する研究内容¹³⁾はあるが、庭園空間造営上に系統的かつ全面的な研究は欠けている。そのために、本研究は御製詩文を切口とし、植物の種類と記録回数を把握した上で、花ことばの観点から庭園空間の構成を解明し、造営上の植物の役割と影響を分析し、庭園空間の特徴を明らかにするとともに、空間造営の構想と手法を考察する。

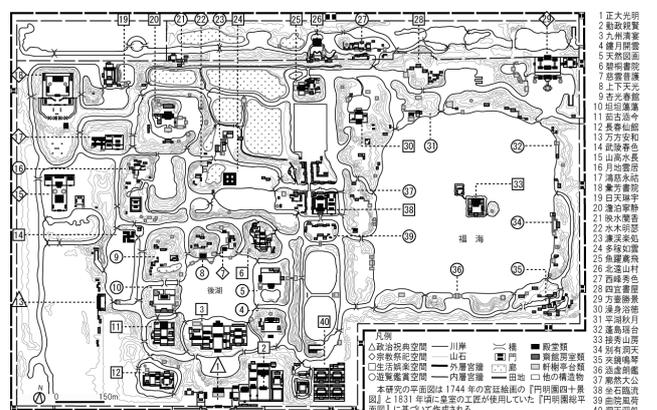


図-1 円明園の平面図

*千葉大学大学院園芸学研究所 **江陵原州大 東海岸生命科学研究所

表一 御製詩文における植物の調査

No.	植物名	学名	生活娯楽		遊覧鑑賞		宗教祭祀		政治祝典		総計	
			N	G	N	G	N	G	N	G	N	G
1	松(マツ)	<i>Pinus</i>	55	9	21	10	3	3	1	1	80	23
2	竹(タケ)	<i>Bambuseae</i>	23	10	32	12	1	1	-	-	56	23
3	柳(ヤナギ)	<i>Salix</i>	27	6	17	7	4	3	-	-	48	16
4	禾穀(カコク)	<i>Poaceae</i>	-	-	37	8	-	-	-	-	37	8
5	桃(モモ)	<i>Prunus persica</i>	21	4	7	5	1	1	-	-	29	10
6	蓮(ハス)	<i>Nelumbo nucifera</i>	15	5	8	5	1	1	-	-	24	11
7	玉蘭(モクレン)	<i>Magnolia denudata</i>	20	1	4	1	-	-	-	-	24	2
8	梅(ウメ)	<i>Prunus mume</i>	7	5	4	3	-	-	-	-	11	8
9	牡丹(ボタン)	<i>Paeonia suffruticosa</i>	-	-	10	1	-	-	-	-	10	1
10	蕨瓜(ヤサイとウリ)	なし	-	-	8	1	-	-	-	-	8	1
11	杏(アンズ)	<i>Prunus armeniaca</i>	1	1	5	2	1	1	-	-	7	4
12	青桐(アオギリ)	<i>Firmiana simplex</i>	3	2	3	2	1	1	-	-	7	5
13	桑(クワ)	<i>Morus alba L.</i>	-	-	6	3	-	-	-	-	6	3
14	柏(コノテガシワ)	<i>Platycladus orientalis</i>	3	3	1	1	1	1	-	-	5	5
15	菊(キク)	<i>Chrysanthemum</i>	2	2	2	2	-	-	-	-	4	4
16	楓(カエデ)	<i>Acer</i>	4	3	-	-	-	-	-	-	4	3
17	芭蕉(バショウ)	<i>Musa basjoo</i>	1	1	2	2	1	1	-	-	4	4
18	李(サモモ)	<i>Prunus salicina</i>	-	-	3	3	-	-	-	-	3	3
19	紫藤(シナヅジ)	<i>Wisteria sinensis</i>	2	2	-	-	1	1	-	-	3	3
20	槐(エンジュ)	<i>Styphnolobium japonicum</i>	1	1	-	-	1	1	-	-	2	2
21	海棠(カイドウ)	<i>Malus halliana</i>	1	1	1	1	-	-	-	-	2	2
22	榆(ニレ)	<i>Ulmus pumila L.</i>	-	-	2	1	-	-	-	-	2	1
23	桂(カツラ)	<i>Osmanthus fragrans</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
24	石榴(ザクロ)	<i>Punica granatum</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
25	楸(トウキササゲ)	<i>Catalpa bungei</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1
26	葡萄(ブドウ)	<i>Vitis spp.</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1

詩文	I	詩文	I	詩文	I
清 六月十九日閑宴 下 確之閑松 柳 柳吟松堂 吟 吟松堂	No.3(九州清宴)	東 東見小園鏡 化 化小園鏡 化 化小園鏡 化 化小園鏡	No.9(杏花春韻)	清 清明拜高安俗 明 清明拜高安俗 明 清明拜高安俗	No.18(鴻慈永祐)
植物: 松	植物: 松	植物: 蕨瓜	植物: 柳	植物: 桃	
NY: 1	NY: 1	NY: 1	NY: 1	NY: 1	
GY: 1	GY: 1	GY: 1	GY: 1	GY: 1	

注: N: 記録回数 G: 御製詩文に該当する植物を記録された庭園の数 T: 詩文の題目
蕨瓜はヤサイとウリの総称であるため、学名はない。詩文の例は一部の原文だけを示す。

表二 明清時代における植物の花ことば

No.	植物名	花ことば	No.	植物名	花ことば
1	松	花強くそびえ立ち青く、寒さに強く、逆境に妥協しない君子の人格と比喩される。つねに緑を保っており、寿命が長いので、「長寿永固」という寓意をもつ。	11	杏	『清明』という詩文では、杏の花が咲いている村が描写され、江南の田園風景という意味が派生する。
2	竹	節骨を忍ぶ緑を存す。節々中空の特徴から、君子の節操と虚心な人格に比喩され、高士化身とみなされる。	12	青桐	伝説では、古代の靈鳥と思われる鳳凰は梧桐の木にしかとまらなから、青桐は富貴吉祥の本木とみなされる。
3	柳	生命力が強く、春の象徴である。「留」と同音であるため、古人が友人を送別する時、柳の枝を折って友人に送り、「引き留める」という意味をもっている。	13	桑	葉をカキコを育てる蠶士の樹である。「桑麻、農桑」などの農業生産の意味をもつことばが派生する。
4	禾穀	粟・稲などのイネ科の農作物である。	14	柏	寒さに強く、寒い環境にも耐え、「百木之长」と評される。剛毅な精神をもつ君子の人格と比喩される。
5	梅	「隱逸詩人」と呼ばれる陶淵明の詩文には、桃の木が武陵源に多く植えられており、後人が俗世間から離れた安楽な世界を「世外源」や「桃源郷」と称される。泥沼の中から生えるが泥に染まらず清い水に洗われて咲く。仏教で知恵と吉祥知恵の象徴である。蓮供は切れても糸はつなぐため、男女の間の愛情にたとえる。	15	菊	「菊を束束の下 悠然として南山を見る」という題詩文から、菊は「花之隱逸」と呼ばれる。
6	蓮	泥沼の中から生えるが泥に染まらず清い水に洗われて咲く。仏教で知恵と吉祥知恵の象徴である。蓮供は切れても糸はつなぐため、男女の間の愛情にたとえる。	19	紫藤	古木の幹には紋様が刻み込まれている姿に似ている。葉が生い茂っており、花の香りが淡雅である。生命力の強さを象徴するものといわれるものの雄略である。
7	玉蘭	「玉石」の「玉」と同じであるため、「貴重、高貴」の意味をもち、権勢を誇り富貴を極める象徴となる。	20	槐	古代には宮に宮位と関連され、縁起のよい樹とみなされ、「門前の槐は玉を招き、金財が入る」と言われる。
8	梅	「梅花の香りは厳しい寒さから生まれるものである」という語があり、「気品、高潔、忍耐」と象徴する。	21	海棠	「花の中の神仙」と「富貴の花」と称される。「子孫繁盛」「家族が栄えたと時にめでたき」とも言われる。
9	牡丹	「古来より「花の王様」と呼ばれ、榮華富貴のシンボルとして上流階級の人々が愛する花である。	23	桂	「貴」と同音であり、「富貴」という意味を強調する。
10	蕨瓜	一般的な野菜やウリなどの農作物である。	24	石榴	花は真っ赤に咲き、実の中に種が多数あるため、子孫繁盛、豊穡のシンボルとされる。

注: 番号は表一に参照する。
No. 16(楓)、No. 17(芭蕉)、No. 18(李)、No. 22(槐)、No. 25(桐)、No. 26(葡萄)は花ことばがない。

3. 御製詩文における植物と植物の花ことばの分類

(1) 御製詩文における植物

257編の御製詩文には、26種の植物^{注1)}が全部で380回記録されている(表一)。松・竹・柳の記録回数が最も多く、それぞれ80回・56回・48回であり、その次は禾穀(37回)・桃(29回)・蓮(24回)・玉蘭(24回)である。梅と牡丹は11回と10回と比較的少なく、他の植物の記録回数は10回以下である。各植物が記録されている庭園の数をみると、松と竹は23カ所と最も多い。次に多いのは柳(16カ所)・蓮(11カ所)・桃(10カ所)であり、その他の植物は10カ所に足りない。

(2) 植物の花ことばと分類

明清時代の花ことばについて記述している代表的な本の『花卉文化与園林觀賞』²³⁾と清時代の園芸論書の『花鏡』²⁴⁾に基づき、明清時代における植物の主となる花ことばをまとめた(表二)。複数の植物は類似した文化的な意味をもつことがわかる。松と竹は寒中にも色褪せず、また梅は寒中に花開き、「高潔・節操」という君子の徳行を表現するものと認識される。桃と菊は「隱逸詩人」と呼ばれる陶淵明の詩文から、「俗世を避ける」という隱棲の意味を備える。玉蘭・海棠・牡丹・桂・青桐・槐・石榴はすべて「富貴」という意味をもつ。また、桑・杏・禾穀・蕨瓜は農作物や郷土の樹木であるが、御製詩文に多数現れているため、本研究はこれらの植物を同じ種類にまとめる。その他の植物はおおよそ花ことばがなく(李・楓・芭蕉・榆・楸・葡萄)、あるいは空間造営上にその花ことばの文化的な影響が弱い(柳・蓮・紫藤)^{注2)}。以上より、26種の植物は「徳行」(松・竹・柏・梅)、「隱棲」(桃・菊)、「富貴」(玉蘭・海棠・牡丹・桂・青桐・槐・石榴)、「農作」(桑・杏・禾穀・蕨瓜)と「その他」の5種類に分けられる^{注3)}。

4. 植物の花ことばからみた庭園空間の特徴

使用目的によって、庭園内に造営すべき境地在り異なり、各造園要素の配置も異なっている。従って、本研究は各機能を持つ庭園の詩文における植物を整理し(表一3、図一2)、詩文に描写されている植物景観のイメージとその空間の構成を解明し(図一3)、空間造営上に植物の役割と文化的な影響を分析し考察する。

(1) 生活娯楽空間

17カ所の生活娯楽の庭園における御製詩文には、20種の植物が190回記録されている。そのうち「徳行」という意味をもつ植物(88回)は最も多く、「隱棲」(23回)と「富貴」(27回)はおおよそ同じであり、「農作」はほぼ記録がない(表一3)。

「徳行」を寓意する植物において、松(55回)と竹(23回)が主体であり(図一2)、それぞれ数十カ所の庭園の詩文に記録されている。生活娯楽空間には、松と竹は広く植えられ、庭園空間

表-3 植物の花ことばからみた庭園空間の特徴

庭園空間	数量	徳行			隠棲		富貴		農作			その他	総計							
		松	竹	桃	松	竹	牡丹	桂	桐	柳	桑			杏	禾					
生活娯楽	55	23	3	7	21	2	23	20	1	1	3	1	1	27	-	-	-	1	51	190
遊覧鑑賞	9	10	3	5	13	4	2	5	1	1	1	2	1	1	6	5	37	8	56	32
遊覧鑑賞	10	12	1	3	12	5	2	5	1	1	1	2	1	3	3	2	8	1	8	11
宗教祭祀	3	1	1	-	5	1	-	1	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	1	7
政治祝典	3	1	1	-	3	1	-	1	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	1	3
政治祝典	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
政治祝典	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

注：N:記録回数 G:御製詩文に該当する植物を記録された庭園の数

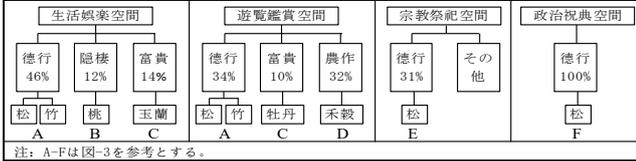


図-2 各庭園における詩文にある主な植物の構成

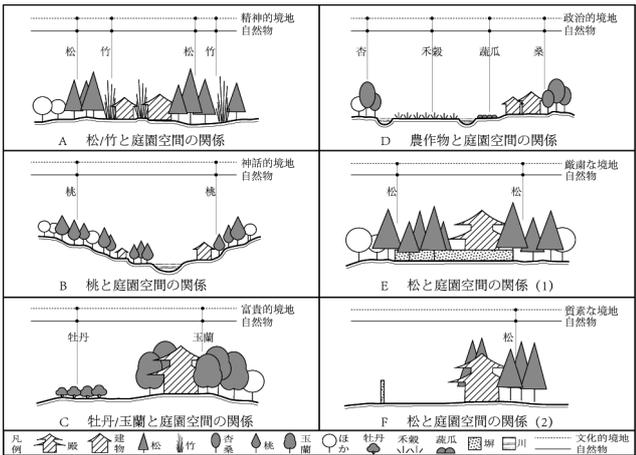


図-3 詩文からみる植物と庭園空間のイメージ

には重要な位置を占めると考えられる。「鬻鬻松陰復竹邊(竹の近くは松の木陰である)」「暫移榻向松間坐(榻を松の林に移って座ったばかり)、恰聽禽來竹裡鳴(ちょうど鳥が竹の林に鳴くのが聞こえてきた)」「月上松梢惟淨色(月が松のこずえに昇り、月の光がさえていた)、風來竹裏是清音(風が竹の林を渡り、清らかな音が生まれた)」などの詩文は松と竹の景色を同時に描写するから、松と竹は常に同じ場面に現れていることがみられる。また「怡情拒華鏡(情操を陶冶するならば、にぎやかなところから遠く離れるべきである)、悦心惟竹素(心地良いのは素朴な竹のみである)」、「誰能後凋侍三冬(誰か松のように寒冬になっても葉が落ちないか)」などの詩文から、皇帝が松と竹のような君子の「徳行」を賛美したことがわかる。これらの詩文のイメージ(図-3A)からわかるように、生活娯楽空間には、松と竹のような植物は自然的な景観のみならず、植物の花ことばを通じて園主の思想を表わし、庭園空間に深い精神的な雰囲気を与えている。

桃は21回記録され、「隠棲」を寓意する植物の主体である(図-2)。「隠逸詩人」と呼ばれる陶淵明の『桃花源記』では、「武陵出身の漁夫は谷川に沿って行くうちに、突然桃の花が咲いている林にたどり着き、桃源郷まで通じている小さな穴を発見した」と書いている。この典故から桃の木は理想郷の表現である桃源郷の代表的な植物となった。御製詩文には、「水南通曲港(流水は南に池と連なっており)、水北入廻溪(北に曲がりくねった小川に流れて入る)、絳雪侵衣艶(衣服が白い花に引き立てられて、このほか鮮やかに見える)、赤霞遶屋低(低い屋の周りは赤い花が咲いている木に囲まれている)」「循溪流而北(小川に沿って北へ向かって)、復谷環抱(山が山谷を取り囲まれている)。山桃万株(山の上に桃の木が無数に植えられ)、參錯林落間(木々の間に雑然としている)。落英繽紛(花が散り乱れる)」などの桃の花が咲いている景観を描写している詩文が多い。これらの詩文から多くの桃

の木は曲水がある山間に植えられていることがわかる。この描写は『桃花源記』にある「緣溪行(谷川に沿って行くうちに)、忽逢桃花林(突然桃の花が咲いている林にたどり着き)……芳草鮮美(香りのよい草は鮮やかで美しく)、落英繽紛(花びらが散り乱れていた)」という景観と重なっている。さらに、「漫問武陵何處(武陵がどこにいるかと問い合わせ)、且來此地移情(ここに来て体験し感じる)」という詩文から皇帝が「桃源郷」のイメージを再現する意図が読み取れる。桃の木は観賞物のみならず、理想と現実を繋げる紐帯とも言える。これらの詩文のイメージ(図-3B)からわかるように、生活娯楽空間では、園主の皇帝は桃の木のような植物を通じて、心静かで何事も自然に任せる思いを寄せ、一部の生活娯楽空間に神話的な境地をつけられる。

「富貴」を寓意する植物は1・2か所の庭園の詩文に記録される。玉蘭は1か所のみ記録されるが、それについての描写は20回と非常に多く(表-3)、ある庭園空間に対して重要な存在と言える。「后宇為含韻齋(後ろの殿は含韻齋であり)、周植玉蘭十余本(周りに玉蘭の木が数十本植えられている)」「鑲銀傘堵白皚皚(透かし彫りの銀のような真っ白で、銀光が目まばゆい)、琢玉雕瓊已啓開(周刻された玉石のような花が満開している)」の詩文から、玉蘭が含韻齋の周りに集中的に植えられたことがわかる。含韻齋は属する庭園の正殿であり、仕様や規模が非常に大きい⁵⁾。古代文化では玉蘭は「金や玉が部屋に満ちる」の象徴とみなされた²⁵⁾。これらの詩文のイメージ(図-3C)からわかるように、玉蘭は正殿と互いに引き立ち、庭園空間の雰囲気はよりいっそう華やかで立派である。

生活娯楽空間をみると、「徳行」を寓意する松と竹は広く植えられ、庭園空間が精神的な雰囲気を備えている。「富貴」を寓意する玉蘭は集中的に植えられ、建築に応じて庭園空間の華やかな雰囲気が強化される。「隠棲」を寓意する桃は、築山・水面の配置とともに、神話的な「桃源郷」の風景を再現する。

(2) 遊覧鑑賞空間

16か所の遊覧鑑賞の庭園における御製詩文には、19種の植物が173回記録されている。そのうち「徳行」(58回)と「農作」(56回)を寓意する植物の記録回数はおおよそ同じで、両者とも詩文に多く見られる。次に多いのは「富貴」(18回)であり、「隠棲」は9回と最も少ない(表-3)。

生活娯楽空間と同様に、竹(32回)と松(21回)は「徳行」を寓意する植物の主体であり(図-2)、それぞれ数十か所の庭園の詩文に記録される。松と竹は広く植えられ、庭園空間の重要な位置を占拠していると考えられる。「松棟連云俯碧瀾(高い建物の近くにある松の木は水面を直下に見おろす)、下有修篁夏幽籟(下には長い竹が薄暗い音を鳴らす)」「屋傍松竹交陰(屋の近くには松と竹の木が交錯し木陰をなす)」などの詩文から、生活娯楽空間と同様に、松と竹は頻りに組み合わせとして植えられていることがみられる。また「便娟蒼秀色(清らかで青々と見える竹)、偏茂歲寒中(あいにく冬の厳しい寒さに生い茂っている)」「愛竹緣他君子節(竹の君子のような節操に愛する)」などの詩文を通じて、皇帝が松と竹の性格を好むことがわかる。これらの詩文のイメージ(図-3A)からわかるように、遊覧鑑賞空間には、生活娯楽空間と同様に、松と竹を多く植えることによって、自然美のみならず、皇帝が求める精神的思惟が反映されている。

「農作」を寓意する植物は遊覧鑑賞空間の詩文のみに多く記録されており、この庭園空間に属する特有な植物とみられる。そのうち禾穀は8か所の庭園の詩文に37回記録され、農作に分類した他の3種類より遥かに多い。「菜甲既勃生(野菜の若葉が生き生きする)、麦穂方飽垂(麦の実入りが充実したばかりである)」「矮屋疏籬(低い屋とすきまの多い垣根)……環植文杏(周りには杏の木を植える)……前畔小圃(前には野菜畑を開拓し)、雜蒔

